

トマスにおける認識の構造について

中 村 治

— 序 —

I 知性のなす認識は何において成立するのか。II 知性は認識の目的をいかなる意味において認識するのか。III 認識はどのようにすれば判明となるのか。これらの問題についてトマスがどのように考えていたのかを、トマスに即して考察するのが本論の目的である。その概略は以下のごとくである。

I 知性のなす認識は何において成立するのか。トマスは「認識は真理の結果である」と言う。それ故、真理が成立するところにおいて認識も成立すると思われる。しかるに真であると言われるのは、知性の形づくる何性、知性の形づくる判断、そしてものである。しかし固有の意味での真理、つまり「ものと知性との対等」が成立するのは、知性の形づくる判断においてである。それ故、認識は知性の形づくる判断において成立する。

II 知性のなす認識は、認識の目的である個物を、その個物の本質をもとにして限定していくことによって成立する。しかるに知性は個物の本質を、個体化の根源である個的質料を捨象して受け取る。それ故、知性はそのようにして受け取られた本質をもとにしては、個物をそれが個物であるかぎりにおいては認識できず、個物を普遍的次元においてのみ認識できる。

III 知性のなす認識は、はじめは不明瞭である。知性はその認識を判明にしていこうためには、認識目的について形づくられた何性を分析していかなければならない。

I 認識は知性の形づくる判断において成立する

知性のなす認識は何において成立するのであろうか。ところでトマスは「認識は真理の結果である」と言う⁽¹⁾。つまり真理が成立すると、そこには認識が結果してくるというのである。それ故、知性のなす認識は何において成立するのかと問うに先立ち、真理とは何であるのか、そして真理とは何において成立するのか、と問うことにしよう。ただしここで⁽²⁾は我々は神における真理、天使における真理を考察から除外することにしよう。

1. さて真理 (veritas) とは何であらうか。真理とは真なるもの (verum) の何性 (quidditas) である。それ故、真理とは何かと問うためには、真なるものとは何かと問わねばならないであらう。ところで、各々のものが何であるのかということの探求が可能であるためには、自体的に知性に知られているある諸原理 (aliqua principia intellectui per se nota) があり、それへの還元がなされるというのでなければならない。ではそのよ

うな諸原理とは何であるのか。トマスはそのような諸原理のうちでも「いわば最もよく知られたもの (quasi notissimum)⁽³⁾として知性がはじめに懐念する (concipere) のは、在るもの (ens) である」と言っている。それ故、真なるものとは何かということを探求する場合も、真なるものの概念を「在るもの」に対する付加から受け取るのでなければならない。

これに対しては「我々は ens など知らない」と反論されるかもしれない。確かに、ens とは何かと問われて、それに満足に答える者はそう多くはいないであろう。しかし、「知られたもの」 (notum) のもとになっている動詞 noscere の意味は「知り始める」 (to begin to know) ということであり、また「懐念する」 (concipere) の意味は「妊娠する」 (to be pregnant) ということである。⁽⁴⁾それ故「aliqua principia per se intellectui nota」とは、自覚的によく知られている原理ではなく、分析していけば自体的に知性に知られていることがわかる原理のことであり、また「quasi notissimumとして知性がはじめに懐念するのは在るものである」とは、分析していけば自体的に知性に知られていることがわかる原理がいくつかあるうちで、最もよく知られている原理として知性がはじめに孕むのは在るものである、というほどの意味であろう。分析的に見ていけば、我々は認識の目的 (finis) を在るものとしてとらえることによって、その認識目的の認識をはじめているのである。しかも自体的に知性に知られた原理としてその在るものをとらえて、認識をはじめているのである。従って、我々は「真なるものとは何か」と探求する場合も、真なるものの概念を「在るもの」に対する付加から受け取るのでなければならない。

しかし種差が類に、あるいは付帯性が基体が付加されるような仕方では、何が在るものに対していわば外的なもののようにして付加されることはできない。なぜなら、いかなるものも在るものであるため、在るものに対して何がいわば外的なもののようにして付加されることは不可能だからである。それ故、在るものに対する付加は、在るものという名称によっては表出されない在るもの自身の様態を表出する (exprimere) かぎりにおいて、⁽⁵⁾在るものの概念に何かを付加するという仕方ではなされる。

しかるに、この仕方による付加には二つの場合がある。その一方は表出された様態が在るもののある特別な様態である場合である。例えば、実体 (substantia) という名称によっては、自体的な在るもの (ens per se) という存在することのある特別な様態が表出されている。⁽⁶⁾それ故実体の概念は、在るものを自体的な在るものとして表わしているかぎりにおいて、在るものの概念に何かを付加している。しかし、真なるものの概念が在るものの概念にこの仕方では何かを付加しているとは思われない。実際もしそうだとすると、諸々の在るものうちのある一部のものだけが実体と言われるようにして、諸々の在るものうちのある一部のものだけが真なるものと言われることになるであろう。しかるに、在るものと真なるものとは概念に関しては (ratione) 異なるものの、⁽⁷⁾主体に関しては (supposito) 同じであるため、相互に転換され得、それ故、どの在るものも真なるものと言われるのでなければならないからである。従ってもう一方の場合、つまり表出された様態がすべての在るものに一般的に随伴する様態である場合にこそ、真なるものの概念が在るものの概念に何かを付加する仕方が見出されるであろう。

だが、これにも二つの場合がある。一方は、表出された様態が各々の在るもの自身に随

伴するというようにして、すべての在るものに一般的に随伴する場合である。他方は、表出された様態が、他のものに対する秩序において一つの在るものに随伴するというようにして、すべての在るものに一般的に随伴する場合である。ここでは、後者の場合について考えてみよう。

これにもさらに二つの場合があるが、そのうち、表出された様態が一つの在るものの他のものに対する適合 (convenientia) に従って受け取られる場合を考えてみよう⁽⁸⁾。この場合も、表出された様態はすべての在るものに一般的に随伴しなければならないのであるから、すべての在るものと適合するように生まれついている何かがあればならないであろう。ではそのような何かとは何であるのか。それは魂 (anima) である。魂は認識力により、可能的にはすべてのものになることができると思われるのである。⁽⁹⁾では認識力たる知性に対する在るものの適合を表出している名称は何か。それは真なるもの (verum) という名称である。それ故真なるものの概念は、在るものを認識された在るものとして表わしているかぎりにおいて、在るものの概念に何かを付加しているのである。

さて、我々は真なるものの概念は在るものの概念に何を付加することによって得られるのか、と問うていたのであった。なぜならその付加された何かこそが、在るものの概念を真なるものの概念たらしめる何か、つまり真理 (veritas) ではないかと思われたからである。しかるにこれまでの考察によれば、真なるものの概念は、在るものを認識された在るものとして表わしているかぎりにおいて、在るものの概念に何かを付加していると思われたのであった。それ故、真なるものの概念の成立には認識が関係しているようである。では在るものは、どのようになれば認識されたものとなるのであろうか。

すべての認識は、認識されたものに対する認識するものの類似化を通じて (per assimilationem) 完成される。そしてその類似化が認識の原因であるのは、視覚が色の種類に従って按配される (disponeri) ということを通じて色を認識する、というようにしてである。それ故、知性に対する在るものの第一の関係は、在るものが知性に合致する (concordere) ということであり、その合致——その合致はものと知性と⁰⁰の対等 (adaequatio rei et intellectus) と言われる——にその在るものの認識が結果する。つまり在るものとして懐念されているものは、在るものとして懐念されているだけではまだ認識されておらず、そのものが知性に合致して両者の間に対等が成立して、はじめて認識されたものとなるのである。

では真なるものの概念が在るものの概念に付加するのは何であろうか。真なるものの概念は、ものが知性に合致して両者の間に対等が成立するという点において成立する、と思われたのであった。それ故、真なるものの概念が在るものの概念に付加するのは、ものと知性と⁰⁰の対等であり、これこそが在るものの概念をして真なるものの概念たらしめる何か、つまり真理である。

2. さて、真理とはものと知性と⁰⁰の対等のことであるということ了我々は見てきた。では真理は何において固有的に見出されるのであろうか。つまり真なるものの概念は、何において固有的に成立するのであろうか。ところで真なるものの概念は、在るものを認識された在るものとして表わしている、と思われたのであった。それ故、真なるものの概念が

固有的に成立するのは、認識力のはたらきが完成されるところにおいてであろう。では認識力のはたらきはどこにおいて完成されるのか。ところでいかなるはたらきであれ、その完成はその終極 (terminus) においてある。しかるに認識力のはたらきは知性へと終極される。なぜなら認識は、認識されたものが認識するものである知性においてあるかぎりにおいて、成立するからである。それ故、認識力のはたらきは知性において完成される。従って、真なるものの概念は知性において固有的に成立するのである。しかしより後に (per posterius) ではあるが、真なるものの概念はものにおいても成立すると思われる。なぜなら、ものも知性に対等されているかぎりにおいては、真なるものと言われるからである。⁰²

さて我々は以下においては、知性において成立する真理について、それが知性の何において成立するのかを考察することにしよう。またものにおいて成立する真理とは何であり、それに認識が結果するのかどうかを考察することにしよう。

知性において成立する真理は、知性の何において成立するのであるか。それは知性認識するという現実活動の結果である知性の懐念 (conceptio intellectus) においてであろう。では知性の懐念とは何であろうか。この問題について考えるため、知性認識するという現実活動はどのようにして生じるのかということに次に考えてみることにしよう。

トマスによると自然的知識 (scientia naturalis) を得る場合は、認識の目的 (finis) は感覚によってとらえられる個物 (particulare) であるという。⁰³ それ故、我々は認識の目的である個物を知性認識するためには、まず感覚によって個物をとらえ、そのようにしてとらえられたものを媒介として、その個物を知性によって知性認識するというのでなければならぬ。では感覚はどのようにして個物を把握するのであるか。

感覚は身体との協働 (communicatio corporis) なしにはその固有のはたらきを持たない。それ故、魂の外にある可感的なものが結合体へとあるものを原因するということが不都合ではないから、感覚することができる部分のはたらきは、可感的なものの感覚への印象づけ (impressio) によって原因される。⁰⁴ 従って感覚は、可感的なものである個物が感覚に印象づけるという仕方でも個物を把握するのである。

ところでそのようにして生じた現実態における感覚によって表象力 (phantastica potentia)、つまり想像力 (imaginativa potentia) においてある種の運動が原因される。それが表象 (phantasia) である。⁰⁵ そして想像力はこの表象をもとにして、さらに複合し分割することによって、個的なものの似像、つまり表象像 (phantasma) を形づくる。⁰⁶ しかし表象像のつくられ方にはもう一つある。感覚からの情報が現存していなくても、記憶力の内に保存されている記憶をもとにして、想像力が複合し分割することによって表象像を形づくることのあるからである。⁰⁷

では知性はそのような仕方でも形づけられる個的なものの類似たる表象像を、どのようにして必要とするのであろうか。それは知性認識のための素材としてである。実際、知性は身体との協働なしにはたらきを持つ。しかるに表象像は個的なものの類似であり、身体器官において存在しているので、知性が持っているのと同じ存在様態を持っていない。それ故、表象像は可感的なものが感覚に印象づけるというような仕方でも、自らの力によって知性に印象づけるということとなし得ないからである。従って、知性に受動的なはたらき

しか認めないならば、知性認識は生じ得ないことになる。

では知性において能動的なはたらきをなすのは何か。それは能動知性 (intellectus agens) である。そしてこの能動知性が表象像へと向き、表象像において抽象するということから、能動知性の力によって可能知性 (intellectus possibilis) においてのもののある種の類似、つまり種の本性に関するかぎりにおいてものの類似である可知的形象 (species intelligibilis) が映る。¹⁹そして知性は、このようにして得られた可知的形象によって形づけられると、さらにそのものの何性や、そのものについての判断を形づくりようになり、²⁰そのものを知性認識しようようになるのである。このようにして知性認識するという現実活動は我々において生じうると思われる。

それ故、知性認識するという現実活動の結果たる知性の懐念とは、何性の懐念と判断の懐念のことであろう。ではこのいずれにおいて真なるものの概念は第一義的に成立するのであるか。トマスは、真なるものの概念が第一義的に成立するのは判断の懐念においてであると言う。²¹その理由は「真理とはものと知性との対等である」と言われる時の「対等」(adaequatio) ということばの持つ意味にあると思われる。実際、対等するということは同一のものが自分自身に等しいということではない。異なった二つのものに等しさが属している時、その両者は対等すると言われるのである。ところで「真理とはものと知性との対等である」と言われるからには、対等するのはものと知性とであろう。では両者は異なったものではないのか。確かに両者は別のものであろう。しかし知性もある意味ではものである。それ故、両者が別々にあるということからだけでは、両者は本当の意味で異なっているとは言えないであろう。それに両者が異なっているとしても、両者に等しさが属していなければ、両者は対等しえないであろう。それ故知性が、ものが持っていない固有のもの、しかもそのものに対応していて、その固有のものとの間で対等が気付かれうる固有のものを、持ち始める時、その固有のものともとは本当の意味で異なったものとなり、しかも両者の間で対等が成立しうることになるであろう。ではものが持っていない知性に固有のものとは何であるのか。それは知性がそのものについて形づくる判断である。我々の知性はものの何性を形づくる時には誤らないが、判断を形づくる時には誤りうると言われる²²ため、何性ともとの間には、判断ともとの間によりも、常に確実な等しさが属しているとも思われる。しかし何性はものの類似にすぎないため、まだ知性に固有なものではなく、それ故まだ本当の意味ではものと異なったものとなっていないのである。従って、「真理とはものと知性との対等である」と言われる時、ものと対等するのは判断であり、判断において真なるものの概念は第一義的に成立する。そして判断における真理にそのものの認識が結果するのである。

さて第一義的には判断において真なるものの概念は成り立つとしても、しかし第二義的には何性あるいは定義においても真なるものの概念は成り立つと言われる。つまり何性あるいは定義において真なる複合が含まれているかぎりにおいてである。²⁴これには二つの場合がある。

一方は、定義がそれに属しているものに属していると言われる場合である。例えば、円の定義が円に帰されるとするならばそうであるがごとくである。

他方は、定義の諸部分が相互に複合されうる場合である。例えば、あるものの定義が感覚できる動物 (animal sensible) であると言われるとするならばそうであるがごとくである。なぜなら含まれている複合、つまり「動物は感覚できる」が真だからである。

しかし何性あるいは定義は、それ自身では真でも偽でもないのであり、それ故、あるものについてそのものの何性を形づくっても、そのものについての認識は結果しない。

さて真なるものの概念は、固有的にそして第一義的には知性の形づくる判断において成立し、知性の形づくる何性においては固有的にはあるが第二義的にのみ成立し、ものにおいてはより後にも成立する、と思われたのであった。ではものにおいて成立する真理、つまりものの真理 (veritas rei) とは何であろうか。またそれには認識が結果するのであろうか。

ものも知性に対等されているかぎりにおいては真なるものと言われるため、ものにおいても真理は成立すると思われたのであった。しかるにもものは二つの知性、つまり神の知性と人間知性との間に設定されており、両者いずれの知性に対する対等に従っても真と言われる。神の知性に対する対等に従って真と言われるのは、ものが神の知性によってそれへと秩序づけられているものを満たすかぎりにおいてである。他方、人間知性に対する対等に従って真と言われるのは、ものが自らについての真なる把握 (apprehensio) を人間知性においてつくるように生まれついているかぎりにおいてである。²⁶ ではいずれの知性に対するにせよ、知性と対等に従ってもものが真であると言われる時、ものを真なるものたらしめている真理とは何であろうか。

ところでものは二種類の真理によって真であると言われる。²⁶ 実際、真理はある種の尺度を同じくすること (commensuratio) をも導入すると言われる。しかるに物体は内在的尺度によっても尺度づけられるし、外在的尺度によっても尺度づけられると言われる。内在的尺度によっても尺度づけられるというのは、物体が線とか面とか深さによって尺度づけられるような場合である。また外在的尺度によっても尺度づけられるというのは、場所の内にあるものが場所によって、そして運動が時間によって尺度づけられるような場合である。それ故同様にして、あるものは二種類の真理によって真なるものと名づけられるであろう。つまり内在的真理と外在的真理によってである。ではあるものがそれによって真なるものと名づけられる外在的真理とは何であるのか。それは神の知性において在る真理、あるいは人間知性において在る真理であろう。ではあるものがそれによって真なるものと名づけられる内在的真理とは何であるのか。それは神の知性に対等された在るもの性 (entitas) であり、人間知性を自らに対等させている在るもの性であると言われる。²⁷

さて我々はものの真理とは何であるのかと問うていたのであった。ところでものの真理というからには、それはものにおいて成立する真理であって、知性において成立する真理ではない。しかるに我々は、ものがそれによって真と言われる真理には内在的真理と外在的真理があり、外在的真理とは神の知性において、あるいは人間知性において在る真理である、ということのみてきたのであった。それ故、ものの真理とは内在的真理、つまり神の知性に対等された、あるいは人間知性を自らに対等させている在るもの性のことであろう。

ところでものの真理にとっては、人間知性に対する関係よりも神の知性に対する関係の方が先である。なぜならたとえもし人間知性がないとしても、ものは神の知性に対する秩

序においてなお真と言われるが、神の知性がないのに、ものが人間知性に対する秩序においてなお真と言われるというようなことはあり得ないからである。それ故、ものの真理にとっては人間知性に対する関係は付帯的である。従って、ものの真理がものにおいて成立しているとしても、人間知性において認識が必ず結果してくるわけではない。

以上において我々は、真理とは固有の意味ではものと知性との対等であり、それは知性の形づくる判断において第一義的に成立するというをみてきた。それ故、真理の結果であると言われる認識は判断において成立するのである。我々は分析的に見れば、認識の目的を在るものとしてとらえることによって、その認識目的についての知性認識をはじめると思われたのであった。しかしその段階では、その認識目的についての知性認識はまだ成立していない。その認識目的についての知性認識が成立する時、つまり知性の受け取った在るものが真なるものへと転換される時というのは、知性が認識目的の本質をとらえ、その本質をもとにしてその認識目的についての真なる判断を形づくる時なのである。

II 知性は個物を普遍の次元においてのみ認識できる

さて知性のなす認識の目的は、感覚によってとらえられる個物 (particulare) であると言われた。ところで知識は必然的で確実なものにかかわる。しかるに感覚によってとらえられる個物は絶えざる流動の内にある。それ故、感覚によってとらえられる個物は知られないのではないか、という疑問が生じてくる⁶⁰。トマスは、感覚によってとらえられる個物についての認識は知性の形づくる判断において生じる、というのであるから、この疑問に対してはもちろん「感覚によってとらえられる個物は知られうる」と答える。では感覚によってとらえられる個物はどのような意味で知られうる、とトマスは考えるのであろうか。

トマスによれば、知性は認識の目的である感覚によってとらえられる個物を在るものとして懐念することによって、その認識目的の知性認識をはじめると思われたのであった。しかしその段階では、その認識目的についての認識はまだ成立していない。その認識を成立させるためには、さらにその認識目的の本質をとらえ、それをもとにしてその認識目的についての真なる判断を形づくらねばならない。ところで認識とは一種のはたらき (actio) である。しかるにはたらきは、はたらきの根源である能動するものの形相の条件に従わねばならない。では現実態における認識というはたらきの根源は何か。それは認識力がそれによって形づくられる認識されたものの類似である。では認識力である知性がそれによって形づくられる認識されたものの類似とは何か。それは認識されたものについて形づくられた表象像から抽象される可知的形象である。それ故知性のなす認識は、可知的形象の様態に従ってあらねばならない。ところで可知的形象を表象像から抽象することとは、表象像によって表わされている個体化の諸根源を考察することなしに認識目的の本性を考察するということである。しかるに表象像によって表わされている個体化の諸根源を考察することなしに認識目的の本性を考察するということは、認識目的をそれが個物であるかぎりにおいて考察することではなく、それを普遍の次元において考察することである。それ故トマスも、知性は認識目的を、それが絶えざる流動の内にあるかぎりにおいて認識できる、とは考えておらず、それを不動の相において認識できるのみであ

る、と考えているのである。では認識目的を普遍的次元において認識するというはどうか。それは認識目的を、種や類や種差や付帯性や固有性 (proprietas) や関係 (habitud) において認識するということであろう。

Ⅲ 判明な知について

さて知性は認識の目的を、それが個物であるかぎりにおいては認識できず、普遍的次元においてしか認識できないということが明らかとなった。ところで知性は可能態から現実態へと進んでいくものであると言われる。⁵⁵それ故、知性は認識目的を普遍的次元においてであれ、一度では判明に認識できない。従って、認識目的についての認識を判明していくには、知性はその認識目的についての判断を積み重ねていかなければならない。では知性はどのようにして認識目的についての判断を積み重ねていくべきなのであろうか。

考えることができるのは、ものの本質を取り囲んでいる付帯性や固有性や関係をとらえて、判断を積み重ねるということである。⁵⁶例えばソクラテスを認識するとしよう。そしてソクラテスが白いとする。そうすると一方では「ソクラテス」という項を形づくり、他方では「白さを持っているもの」という項を形づくり、両者が同一であると主張するようにして「ソクラテスは白い」という判断を形づくるのである。⁵⁷するとこの判断は真であるから、ソクラテスをその付帯性の一つに関して知ったことになる。しかしソクラテスの本質を取り囲んでいる付帯性や固有性や関係についての判断を、このようにしていくら積み重ねていっても、それは「ソクラテスとは何か」ということの解明には大して役立たないであろう。それ故、認識目的についての認識を判明していくには、その認識目的の本質をとらえ、それをもとにして形づくる何性を分析していかなければならないと思われる。

では我々は何性をどのように分析していくべきなのであろうか。ところで何性が分析されるとすれば、それは二様の仕方においてである。⁵⁸一つは、連続的なものが分析されるようにであり、他方は、種的に分割されていないものが分析されるようにである。それ故、何性は連続的なもののようにしてならば、家が壁や屋根へと分析されていくようにして分析されねばならないし、種的に分割されていないもののようにしてならば、人間の概念が「理性的なもの」の概念と「動物」の概念へと分析されていくようにして分析されねばならない。

しかしこのように何性を分析していけるためには、我々は前者の場合ならば家を知っているよりも先に家の個別的諸部分、つまり壁や屋根を知っていなければならないし、後者の場合ならば人間を知っているよりも先にそれより普遍的なもの、つまり動物と理性的なものを知っていなければならない。だが我々はそれらを本当により先に知っているのであろうか。他の哲学者はともかくも、トマスは「我々はそれらをより先に知っている」と考えているように思われる。⁴⁰では我々は最終的にはどこまで分析していけば、認識目的を判明に、そして確実に認識したことになるのであろうか。まず後者の場合について考えてみることにしよう。

ポルフィリウスによると、動物にとっての類は生物であり、生物にとっての類は物体であり、物体にとっての類は実体である。⁴¹そして実体はトマスによれば自体的な在もの (ens per se) のことであつた。⁴²では在ものはさらに何かに還元できるであろうか。そ

れは不可能である。なぜならトマスによれば、在るものは自体的に知性に知られた原理であると言われているからである。それ故我々は、例えばソクラテスを判明にそして確実に知ろうとするならば、その概念を在るものの概念にまで分析すべきではないだろうか。事実トマスも「各々のものが何であるのかを探求することにおいては、自体的に知られている原理への還元がなされねばならない。しかるに知性がはじめに最も知られたものとして懐念し、すべての懐念をそこへと分解するところのものは在るものである」と言っているのである。⁴³そしてソクラテスの概念を一度は在るものの概念へと分析したうえで、そこから再び付加によってソクラテスの概念を受け取ると、我々はソクラテスをはじめて判明に、そして確実に認識したことになると思われるのである。我々は例えばソクラテスを認識する場合ならば、ソクラテスを在るものとして懐念することによって、ソクラテスの認識をはじめると思われたのであった。そしてソクラテスの本質をとらえ、それをもとにしてソクラテスについて真なる判断を下すことによって、その認識は一応成立する。しかしその認識を判明で確実にできるのは、その認識によって得たソクラテスの概念を在るものの概念にまで分析し、在るものの概念に対する付加からソクラテスの概念を再び受け取る時ではないか、と思われるのである。

では前者、例えば家を認識する場合ならば、その何性をどこまで分析すれば、我々はその家を判明に認識したことになるのであろうか。しかしこの問題の考察には、家のように総体的全体 (totum integrale) と言われる個物についてのトマスの考えを吟味したうえで、またとりかかるとしたい。

〔西哲史 研修員〕

— 註 —

本論を書くのに主として用いたトマスの著作は『真理論』(De veritate, 以下 De verit. と略す)、『神学大全』(Summa Theologiae, 略称 Sum. Theol.)、『靈魂論註解』(In Aristotelis librum de anima, 略称 In de an.) である。『真理論』は Leonina 版を用い、『神学大全』と『靈魂論註解』は Marietti 版を用いた。

なおトマスの認識論については、筆者はすでに『中世思想研究』第23号においてもその概略について論じたが、本論では特に認識の構造の面に焦点をあてて考察しようとした。

- (1) De verit., q. 1, a. 1c.
- (2) 「認識は真理の結果である」と言われる時、そこで問題とされている真理は、後で明らかとなるように「ものと知性との対等」(adaequatio rei et intellectus) のことである。しかるに神における真理とは「神の本質と神の知性との等しさ」(aequalitas intellectus divini et rei quae est essentia eius) であると言われる (De verit., q. 1, a. 7c.)。また天使における真理は De verit., q. 1 では問題にされていない。
- (3) De verit., q. 1, a. 1c.
- (4) cf. A Latin dictionary by Lewis and Short
- (5) De verit., q. 1, a. 1c.
- (6) ibid., q. 1, a. 1c. exprimere とは to squeeze out ということである。
- (7) Sum. Theol., I, q. 16, a. 4c.
- (8) De verit., q. 1, a. 1c.
- (9) ibid., q. 2, a. 2c.
- (10) De verit., q. 1, a. 1c.

- (1) *ibid.*, q. 1, a. 2c.
- (12) *ibid.*, q. 1, a. 2c. a. 3c.
- (13) *Sum. Theol.*, I, q. 84, a. 8c.
- (14) *ibid.*, I, q. 84, a. 6c.
- (15) *In de an.*, III, lect. 6, nn659, *Sum. Theol.*, I, q. 84, a. 6, ad 2.
- (16) *Sum. Theol.*, I, q. 84, a. 6, ad2, q. 84, a. 7, ad 2, q. 85, a. 1, ad 3.
- (17) *ibid.*, I, q. 84, a. 6, ad2, q. 84, a. 7c, q. 85, a. 2, ad 3.
- (18) *ibid.*, I, q. 84, a. 6c, q. 85, a. 1, ad 3.
- (19) *ibid.*, I, q. 14, a. 12c, q. 85, a. 1, ad 3.
- (20) *ibid.*, I, q. 85, a. 2, ad 3, *De verit.*, q. 3, a. 2c.
- (21) *De verit.*, q.4, a. 2c.
- (22) *ibid.*, q. 1, a. 3c.
- (23) *Sum. Theol.*, I, q. 17, a. 3c. *De verit.*, q.1, a. 12c.
- (24) *ibid.*, I, q. 17, a. 3c. *De verit.*, q. 1, a. 3c, a. 12c.
- (25) *De verit.*, q. 1, a. 2c.
- (26) *ibid.*, q. 1, a. 5c.
- (27) *ibid.*, q. 1, a. 4c.
- (28) *ibid.*, q. 1, a. 2c.

(29) 認識の成立のためには、認識目的が *ens* としてとらえられているということのほか、認識目的の *essentia* もとらえられていなければならない。『*De ente et essentia*』において「知性によってはじめに懐念されるのは *ens* である」とは言われず、「知性によってはじめで懐念されるのは *ens* と *essentia* である」と言われているのは、このことと関係していると思われる。また『*De veritate*』 q. 1, a. 1c. において「知性に対する *ens* の第一の関係は、*ens* が知性に合致することである」と言われながら、その合致は「*ens* と知性との対等」と言われず、「*res* と知性との対等」と言われたのもこのことと関係していると思われる。真理の成立のためには、知性と合致する *ens* は *essentia* を持っていなければならないが、*ens* を *essentia* を持っている *ens* として表わしているのは *res* という名称であり、*ens* という名称ではないからである。

- (30) *Sum. Theol.*, I, q. 84, a. 1c.
- (31) *De verit.*, q. 2, a. 6c.
- (32) *Sum. Theol.*, I, q. 85, a. 1, ad 1.
- (33) *ibid.*, I, q. 12, a. 4c, q. 85, a.1, ad 1.
- (34) *ibid.*, I, q. 84, a. 1, ad 3, q. 85, a. 5c.
- (35) *ibid.*, I, q. 85, a. 5c.
- (36) *ibid.*, I, q. 85, a. 5c.
- (37) *ibid.*, I, q. 85, a. 5, ad 3.
- (38) *ibid.*, I, q. 85, a. 8c.
- (39) *ibid.*, I, q. 12, a. 10, ad 1, q.85, a. 3, ad 3, q. 85, a. 8c.
- (40) *ibid.*, I, q. 85, a. 3c, ad 3 しかし例えばデカルトはこのように考えていないと思われる。なぜなら『*Meditationes*』 II, A. T. VII, 19, で彼は次のように言っているからである。「人間とは何であるのか。人間とは理性的動物であると私は言うべきか。いや言うべきではない。なぜなら後で、動物とは何か、理性的なものとは何か、と問わねばならず、かくて私は一つの問題から多くのより困難な問題に陥るだらからである」
- (41) Porphyrius, 『*Εἰσαγωγή περὶ εἰδους*』.
- (42) cf. 本論第1章 第1節
- (43) *De verit.*, q. 1, a. 1c.

Summary (欧文要旨)

The structure of cognition in St. Thomas

Osamu Nakamura

In this paper, the author tries to clarify Thomas's view on the structure of cognition by interpreting some of his works. The consideration proceeds along the following lines.

1. Thomas says cognition is the effect of truth, therefore cognition is produced where truth is produced. Now proper truth is *adaequatio rei et intellectus*, and it, in turn, is produced in the judgment of an intellect. Consequently, cognition is produced in the judgment.
2. A cognition of an individual thing is produced by the limitation by an intellect. And the intellect makes the limitation on the ground of the essence of the thing. However the intellect accepts the essence without individual matter, which is the principle of individualization. Consequently, the intellect cannot recognize the thing as it is individual, but can recognize it only in its general aspects.
3. A cognition of an individual thing is not clear at first stage. In order to clarify the cognition, the intellect must analyze the *quidditas* of the recognized thing.